

目次

総提要	1
1. 漢語の語音とは何か —— 声・韻・調について	1
2. 古音と今音	2
[上古漢語] [中古音] [古音学]	
[中古漢語] [今音] [今音学]	
3. 宋代から現代まで	3
第1節——音韻とは何か	4
第2節——声母、韻母と声調	7
1. 声母	8
2. 韻母	13
3. 声調	15
第3節——反切と双声・疊韻	16
1. 反切	16
2. 双声・疊韻	22
第4節——韻書	23
「唐人忌諱反字」について	31
第5節——等韻学	32
第6節——古音学	38
1. 上古の韻母系統	38
2. 上古の声母系統	41
1 上古には軽唇音がなかった / 2 上古には舌上音がなかった /	
3 娘母・日母は泥母に属した / 4 照系の二等は精系に属した /	
5 喻三は匣に属した / 6 喻四は定に属した	

総提要

漢字の三大要素である形・音・義について、それぞれ伝統的な漢語研究の文字学・音韻学・訓詁学という三大門類がある。漢語語音に特有の音節構造である声・韻・調を総合して音韻（声韻）と称するが、音韻学はその歴史的研究であり、音韻知識は古医籍研究においても校勘資料となり、また経文解釈にも応用される。六朝・隋・唐代の語音系統である今音を研究する今音学、音節構造を分析表示する等韻学、先秦～漢代の語音系統である古音を研究する古音学に分けられる。

音韻学は漢語語音系統の歴史的研究であるため、現代漢語成立までの漢語語音史、すなわち現在知られるもっとも古い漢語である上古漢語からの語音体系の変遷の歴史と密接な関係を有しているので、まず漢語語音史の概略を述べる。

1. 漢語の語音とは何か —— 声・韻・調について

漢語音韻学では漢語の声・韻・調からなる語音体系を研究対象としている。一つの漢字が表す音声単位である音節は声母・韻母・声調からなり、現代漢語の「天【**tien**】」を例にとると次のような構造をしている。

天【**tien**】の声母、または声紐ともいわれる頭子音は舌尖を上歯の裏につけ、息でそれを破って出す（有気歯音）「**t**」である。

声母と韻母をつないでいる（介音）、舌面を持ち上げて平らにする（齊歯呼）「**i**」、主要元音の口を半広げにして口むろの前部で出す「**ɛ**」、韻母の最終部分である韻尾「**n**」を合わせて韻母という。また韻母全体は高く平らな調子（第一声）の声調で発音される。

漢語の音節 **syllable** は声母 **initial** と韻母 **final** からなり、一定の声調 **tone** で発音される。韻母を構成する成分のモードは「介音 **medial** + 主要元音 **vowel** + 韻尾 **ending**」であるから、漢語の音節構造の一般式は「**S=IMVE/T**」とされる。

声母・韻母・声調を略して声韻調、また合わせて音韻という。長い歴史の中で漢語語音の音節構造は変わらないと考えられるが、その内容は時代とともにさまざまに変化してきた。

その中で七世紀頃の中古漢語では声母は三十六、また韻母と声調の積であるともいえる韻目は二百六に分けられて長いあいだ標準とされ、研究されてきた。ところが、清朝の考証学者たちによって『詩経』の押韻法や『説文解字』の声符の研究などから先秦～漢代における声母や韻部の復元が試みられるようになった。その結果、現在では漢語語音史の概略は以下のものであると考えられている。

2. 古音と今音

[上古漢語] [中古音] [古音学]

先秦時代を中心に前漢末期までの漢語を語史区分上、上古漢語 Archaic Chinese と称し、その語音系統を古音、古音を研究する音韻学の一分野を古音学という。

王力『漢語語音史』(1985年)では古音の声母は三十三で、唇歯音 (f f' v w) が双唇音 (p p' b m) から未分化であるなどの特徴が見られる。たとえば『素問』金匱真言論篇の「藏精於肺、故病在背」の「肺」は上古音では「滂 p'」母、「背」は同じく「幫 p」母でともに双唇清音の近似音である。「肺は(発音通り)病を背に宿すのである」という、漢字の字義を類似音の字で説明する「声訓」という言語習慣による説明であることがわかる。また韻部は二十九韻部に区分される。『素問』上古天真論篇・王冰注本の「起居有常、不妄作勞」は新校正注の伝える全元起注本では「起居有常度、不妄不作」になっている。この「度」と「作」は上古韻部ではともに(八)鐸部開一 [—ak]で押韻していることから、正しい経文は全元起注本に従うべきであることがわかる。

[中古漢語] [今音] [今音学]

上古漢語は後漢期から変化し始め、魏晉南北朝から隋・唐代までの漢語を中古漢語 Ancient Chinese と称し、その語音系統を今音、今音を研究する一分野を今音学という。

隋代、陸法言を中心として編纂された『切韻』(601年成書、佚亡)は六朝末の標準的読書音の体系を示すもので、唐代を通じていくたの増訂が加えられ、その現存する最後のものである『広韻』(1008年成書)はその後の今音学の中心資料となった。

隋一中唐期(581～836)には声母は上古音系とはやや異なる音系の三十三から三十六に分化し、また韻部は魏晉南北朝の四十二から五十に分化した。

晩唐一五代（836～960）には濁音声母が清音に変化し始め、韻部が四十に統合された。日本呉音「地ヂ」や「大ダイ」が漢音で「チ」「タイ」となり、また日本呉音の「肩ケン」と「建コン」が漢音ではともに「ケン」となる現象は中唐の北方漢語における音韻変化を反映しているといわれる。

3. 宋代から現代まで

宋代（960～1279）には声母は濁音の消失から二十一になり、韻部は三十二に統合されるがまだ入声は残っている。

元代（1279～1368）では周徳清『中原音韻』（1324）などが当時の大都（北京）音の資料として残り、声母は半元音「呉 w」の出現などから二十五、韻部は入声の清失などから十九となる。従来の清音声母の声調は陰平（現代音の一声）に、濁音声母は陽平（現代音の二声）に変化する。この時代の漢語を中世漢語と称し、またその音系を近代音ともいう。

明代（1368～1644）には声母は二十一、韻部は十五となる。

清代（1644～1911）には舌面前音が増加して声母は二十三となるが、韻部は変わらない。

現代（1911～）北京音系では声母は同じく二十三、韻部は[e]が増加して十六となる。

緒 言

以下に音韻学課本として高等中医院校教学参考叢書『医古文』（主編：段逸山、副主編：趙輝賢、北京・人民衛生出版社、1986年刊）下編・第三章「音韻」（趙輝賢執筆）を訳出し、適宜注を加える。

第 1 節——音韻とは何か

「音韻」はまた「声韻」ともいい、漢字字音の構造中、「声・韻・調」という三要素の総称である。音韻を専門に研究する科学を「音韻学」または「声韻学」という。

「音韻学」は「語音学^{注一}」とは異なり、語音学が語音を一種の生理現象また物理現象として研究するのに対して、音韻学は語音を一種の交際工具として研究するのである。そこで語音学上のおびただしい精密分析的作業は、音韻学上では一切必要とされない。音韻学は語音系統の沿革を研究し、字音構造中の声・韻・調の三要素を重視し、ならびにその異なった歴史時期における分合異同を研究するのである。その研究範囲は古音^{注二}、今音^{注二}、等韻^{注三}、現代音を包括している。

注一：【語音学】 語音を研究する科学で、言語学の一部門。次のように分けられる。

- (一) 一般語音学：人類言語中の各種の声音の構成、音と音の結合と相互の発生変化を研究し、声調、語調、軽重音などの現象に及ぶ。
- (二) 歴史語音学：ある言語の各歴史時期における語音の演変およびその発展法則を研究する。
- (三) 描写語音学：ある言語の一定時期の語音系統およびその特殊現象を研究する。
- (四) 実験語音学：実験器具を用いて語音の物理現象および生理現象を研究する。
- (五) 応用語音学 （『辞海』より）

注二：【古音】【今音】 以前の音韻学者は周・秦・両漢の語音を称して古音といい、隋・唐・宋の語音を今音といった。現代の音韻学者は前者を上古音、後者を中古音という。（同）

注三：【等韻学】 中国古代の漢語の発音原理と発音方法を分析する一門学科。等呼によって韻母の構造を分析し、七音によって声母の発音部位を分析し、また清濁によって声母の発音方法を分析し、字母によって漢語の声母系統を表示する。（以下略、同）

言語は絶え間なく前方へと発展し続けるものであるが、その言語の歴史変化の中で語音の発展変化がもっとも複雑かつ顕著であろう。

『詩経』王風の「君子于役」^{注一}を例にとってみよう。

君子于役	君子ここに役す
不知其期	其の期を知らず
曷至哉	いつかそれ至らむや
鷄棲于埗	鷄 ^{ねぐら} 埗 ^す に棲む
日之夕矣	日の夕べ
羊牛下來	羊牛下り来る
君子于役	君子ここに役す
如之何勿思	如何ぞ思ふこと勿 ^な からんや

詩中の「期・哉・埗・矣・來・思」は上古では元来すべて押韻^{注二}していた。しかし中古になって二つの韻に分かれ、「期・埗・矣・思」は「之」部、「哉・來」は「哈」部に属することになってはや押韻しなくなってしまった。現代に至っては「期・埗・矣・思」はさらに分化して「期・矣」は同韻、「埗・思」が同韻であり、新体詩にあつてはもはや押韻されないのである。

注一：『詩経』：五経の一。古くはただ『詩』とよび、最古の歌謡集。前600年ころ編集。国風・小雅・大雅・頌の四部に分かれ、合計三〇五篇。（『中国語学新辞典』より） 「王風」の王は東周の王城・洛陽の畿内、風は風謡の意味である。「君子于役」は「夫は役所の役務に行く」の意味。「遠く役に出たまま帰らぬ夫を思う歌。家では牛羊を飼っているのであろう。夕方、鷄はねぐらに、牛羊も追われて小屋にもどってくる。しかし夫は役に出たまま、いつ帰るともわからない」（白川静『詩経国風』平凡社）

注二：遠上寒山石逕斜 白雲生處有人家
停車坐愛楓林晚 霜葉紅於二月花 ——（杜牧「山行」）
猿啼客散暮江頭 人自傷心水自流
同作逐臣君更遠 青山萬里一孤舟 ——（劉長卿「重送裴郎中」）

……例で示したように、七言絶句では第一句第二句第四句の最後の字は、「斜、家、花」、「頭、流、舟」などのように、同じひびきを有った字が使われて居る。これを韻字という。五言絶句では、第二句第四句である。韻はひびき、音はおとである。……同じひびきを有っている字を句の最後において調子をととのえる。これを韻脚をそろえるという。句の最後で韻をあわせるというのを脚韻という。韻をあわせるのを、韻をふむともいう。押韻ともいう。（釋清潭・林古溪『作詩關門』明治書院）

このような知識を掌握できれば私たちが古代の韻文を閲読する助けになるばかりではなく、またこれを利用して漢字の形・音・義を分析することができる。例えば私たちが上古には（中古の）「之・哈」部が同韻部であったという法則を掌握したならば、漢字のある現象が正確に解釈できるであろう。

すなわち、「飴、怡、治、笞」と「苔、胎、殆、怠」は今日発音すれば異なる韻であるが、それではなぜ「台」を声旁^{注一}とするのか？また「腮、埃」は「哈」韻字であるが、それではなぜ「之」韻字である「思、矣」を声旁とするのであろうか？という問題である。

『内経』宣明五氣篇の中で「心爲噫」とある「噫」^{注二}はなぜ「噯」と読まれ、また「噫嘻」^{注三}の「噫」はなぜ「医」と読まなければならないのであろうか？

これらはまさしく、上古に「之」と「哈」が同韻部であったために「飴、胎」などの字の声旁は相同じで、それゆえ「腮、埃」などの字もひとしく「思、矣」を声旁としたのである。

中古に到って「之」と「哈」は分化し、こうして多くの元来は同じ声旁であった字のあるものは「之」韻に入り、あるものは「哈」韻に入ることになったのである。そうして少数の字は左右に断った蓮根の糸が引かれるように二種の発音を残したので、「噫」はまさにその一つであった。

このように音韻学の知識を掌握することは私たちが古書を閲読し、また古代漢語を学習する上で大きな助けとなるのである。しかし音韻学のはたらきはそれにとどまるものではなく、文字・訓詁とも関係を有し、また語法・修辞とも関係を有し、また工具書とも関係を有している。総じてこれをいえば、私たちが古書を読み、古代漢語を学習するためには音韻を通らなければならないものなのである。

注一：【声旁】 漢字の形体を分析する述語。形声字の結構中、読音を表示する部分。形旁に相對して言う。「糧」や「崖」は形旁「米」・「山」と声旁「量」・「厓」によって構成されると分別される。（『漢語大詞典』卷八耳部「聲」より）

注二：『素問』宣明五氣篇第二十三「五氣所病、心爲噫」、『太素』卷六藏府氣液「五臟氣、心主噫、肺主亥欠、肝主語、脾主吞、腎主欠」楊上善注「噫、乙戒反、飽滿出氣也。五藏從口中出之氣、皆是人常氣之變也。」

注三：【噫嘻】 嘆詞。（一）贊嘆を表示する。『詩』周頌・噫嘻「噫嘻成王、既昭假爾（ああ成

王、既に爾なんじに昭仮す」鄭玄注「噫嘻、有所多大之聲」。一説になお噫音欠のごとく、祝神の聲。馬瑞辰通釈「戴震がいうには噫嘻はなお噫音欠のごとく、祝神の聲である」。…(二) 慨嘆を表示する。『史記』魯仲連鄒陽列伝「魯仲連曰く、吾、まさに秦王をして梁王を烹て醢しおからにせしめん、と。新垣衍 怏然として悦ばず、曰く、噫嘻、また太甚なるかな先生の言や、と」。

(『漢語大詞典』卷三口部「噫」より)

十月八日鴻雁來賓

第2節——声母、韻母と声調

漢語音韻学においては、音節の概念が非常に重要である。漢語は古代では単音詞注一が優勢な言語であった。いわゆる単音詞とは、すなわち一つの単語(詞)が一音節のものである。現代漢語(中国語)では双音詞(二音節語)注二が多数をしめているが、しかしこれらの双音詞も来源からいえばこれもまた単音詞の複合であり、だからすべて一音節ごとに相対的な独立性があるわけである。

一つの音節は一つの字(漢字)で表現される。伝統的な言い方では、すべての音節には一つの元音(母音)があり、元音の前後には輔音(子音)や半元音(半母音)がともなわれることがある。漢語では元音の音程の上げ下げと音の長短の総和が声調を形成している。こうして漢語音韻学ではすべての字に声・韻・調があると規定される。声は声母、韻は韻母、調は声調のことである。以下、音韻学的観点から声母・韻母・声調の三方面についてそれぞれ叙述する。

注一：子・日・学のように一音節で運用される「詞」。ほとんどの単語が一音節であるゆえに「音節が重要」といわれる。

注二：中国・学生・形成のように二音節で運用されるもの。「音韻学」のように三音節以上で運用されるものと合わせて複音詞という。複音詞には来源から詞の複合(例：中+国→中国)である合成詞と混沌・膀胱・蚯蚓のように一字ずつでは運用されない単純複合詞がある。

1. 声母

漢語音韻学では一つの音節（すなわち一つの字音）を二つの部分に分け、前にあるものを「声母」、後にあるものを「韻母」という。声母は輔音であることが多いが、声母と輔音は異なる概念である。声母は音韻学的、輔音のほうは語音学上の用語である。声母がすべて輔音であるとは限らず、「陰」・「陽」のように元音開頭の字があり、習慣上これらの字の声母を「零声母」と呼ぶ。一つの音節で輔音が必ず声母になるとは限らず、ここで挙げた「陰」・「陽」二字もそれぞれ [n] と [ŋ] という輔音をもっているが（現代漢語音）、これらの字尾輔音は声母とはみなされない。

現代漢語には二十二の輔音がある。二十二の輔音の中から声母とならない [ŋ] を除き、零声母を加えると、声母の総数は二十二となる。その二十二の声母とは次のようである。

唇音：p^{注一}（拼音 b）幫，p'^{注二}（p）滂，m^{注三}明（同），f^{注四}非（同）

注一：日本語のパ行の子音（無気音）。

注二：その有気音。

注三：マ行の子音。

注四：ドレミファのファの子音。

齒音破裂：t^{注一}（拼音 d）端，t'^{注二}（t）透，n^{注三}泥（同），l^{注四}来（同）

注一：タ行の子音。

注二：その有気音。

注三：ナ行の子音。

注四：ラ行の子音。

舌根音：k^{注一}（拼音 g）哥，k'^{注二}（k）科，x^{注三}（h）喝

注一：カ行の子音。

注二：その有気音。

注三：ハ行より強い子音。

舌面音：tʃ^{注一}（拼音 j）基，tʃ'^{注二}（q）欺，ç^{注三}（x）希

注一：茶やチの子音。

注二：その有気音。

注三：社やシの子音。

卷舌音^{注一}：tʂ^{注二}（拼音 zh）照，tʂ'^{注三}（ch）穿，ʂ^{注四}（sh）審，r^{注五}日（同）

注一：歯を合わせ唇を横に開き舌先を上顎に当てて発音する。

注二：上の要領で出す茶やチの子音。

注三：その有気音。

注四：同じく社やシの子音。

注五：同じくラ行の子音。

歯音破擦、摩擦^{注一}：tʂ^{注二}（拼音 z）資，tʂ'^{注三}（c）雌，s^{注四}思（同）

注一：歯を合わせ舌先をその合わせ目に当てて発音する。

注二：ツァの子音。

注三：その有気音。

注四：サ行の子音。

元音：（零声母^{注一}を表す）

注一：元音の前に輔音が不在である音節、輔音が不在である声母という意味で零声母といわれる。

以上に述べたのは現代漢語の声母系統である。古代漢語の声母系統については、ここでは唐代の守温^{注一}の三十六字母を挙げておきたく、『切韻』時代の三十六声母と『中原音韻』の二十声母に関しては後出の「韻書」（第四節）で詳しく述べる。

注一：生卒年不詳、唐末の僧侶。悉曇（サンスクリット語の字母）を参照して声類三十字母を考案した。敦煌写本残巻に残る。

伝えられる三十六字母は唐末の僧侶・守温が作ったもので、この三十六字母で三十六の声母を表している。以下に字母を一般に用いられている次序によって配列し、例字を挙げる：

一、**見母**（全清牙音^{注一}） 例字：公江居該堅驕經兼

二、**溪母**（次清牙音^{注二}）：空欺区苦塊看敲康

三、**羣母**（全濁牙音^{注三}）：窮共奇渠權狂瓊求

四、疑母（次濁牙音^{注四}）：宜危魚吾銀我顔傲

注一：声母は唇・舌・牙・齒・喉の五音に分けられ、半舌・半齒を合わせて七音とされた。牙音は角音ともいい発音法は「舌縮却」、現代の舌根音にあたる。全清は無声無気音。

注二：無声有気音。

注三：有声音。

注四：清濁、不清不濁ともいい、鼻音・流音などのこと、牙音では鼻音。

五、端母（全清舌頭音^{注一}）例字：東端督顛当到斗胆

六、透母（次清舌頭音）：通土退泰歎探添湯

七、定母（全濁舌頭音）：亭談但杜道毒特蝶

八、泥母（次濁舌頭音^{注二}）：南難原作歎奴惱寧年乃農

注一：舌音は微音ともいい発音法は「舌柱齒」、舌頭音と舌上音に分かれ舌頭音は齒音（破裂）にあたる。

注二：鼻音。

九、知母（全清舌上音^{注一}）例字：中追征猪鎮張著竹

十、徹母（次清舌上音）：小中痴寵畜抽救詔挿

十一、澄母（全濁舌上音）：沈鄭伝純陳柱除治

十二、娘母（次濁舌上音^{注二}）：濃尼女匿狙黏孃娘

注一：齒音（破裂）の卷舌音。

注二：鼻音。

十三、幫母（全清重唇音^{注一}）例字：布卜拝波奔包秉辺

十四、滂母（次清重唇音）：普沛派配匹攀片判

十五、並母（全濁重唇音）：旁薄袍貧僕蒲別白

十六、明母（次濁重唇音^{注二}）：門芒母貌夢莫馬蠻

注一：唇音は羽音ともいい発音法は「撮口聚」、重唇音と軽唇音に分かれ重唇音は双唇音（p, p', b, m）にあたる。

注二：鼻音。

十七、非母（全清輕唇音^{注一}）例字：風非甫廢分弗方富

十八、敷母（次清輕唇音）：豊霏撫肺芬拈芳副

十九、奉母（全濁輕唇音）：馮肥父吠憤仏房婦

二十、微母（次濁輕唇音^{注一}）：微無文問物亡網尾

注一：唇齒音（f, f', v, ε）にあたる。

注二：鼻音。

二十一、精母（全清齒頭音^{注一}）例字：総子進酔津原作是 箭曾奏

二十二、清母（次清齒頭音）：邨餐侵親秋倉千聡

二十三、從母（全濁齒頭音）：残存慚錢字賊就籍

二十四、心母（全清齒頭音^{注一}）：掃歳算送思昔速蘇

二十五、邪母（全濁齒頭音）：松隨遂詞徐祥夕旋

注一：齒音は商音ともいい発音法は「開口張」、齒頭音と正齒音に分かれ齒頭音は齒音の破擦音（ts系）と摩擦音（s系）にあたる。

二十六、照母（全清正齒音^{注一}）例字：終吹諸制震哲戦照

二十七、穿母（次清正齒音）：充出初叱川又創抄

二十八、牀母（全濁正齒音）：崇実術舌巢蛇状食

二十九、審母（全清正齒音^{注一}）：束詩書輸失舜説少

三十、禪母（全濁正齒音）：成臣熟是樹受甚涉

注一：舌面音の破擦音（tç系）と摩擦音（ç）にあたる。

三十一、曉母（次清喉音^{注一}）例字：呼希馨休火共胸虚海

三十二、匣母（全濁喉音）：效賢桓学含行横還

三十三、影母（全清喉音）：烟安憂衣一抑悪鬱

三十四、喻母（次濁喉音^{注一}）：融逸越為余用陽友

注一：喉音は宮音ともいい発音法は「舌居中」、浅喉音は舌根摩擦音、深喉音は声門破裂音に当たる。

注二：半元音。

三十五、来母（次濁半舌音^{注一}）：裏隆盧鸞靈劉連列

注一：舌尖辺音（l）にあたる。

三十六、日母（次濁半齒音^{注一}）：而柔饒閏儒戎肉入

注一：舌面鼻音（nz）にあたる。

清濁 發音部位		全清	次清	全濁	次濁
牙音		見 k	溪 k'	羣 g	疑 η
舌音	舌頭	端 t	透 t'	定 d	泥 n
	舌上	知 t̚	徹 t̚'	澄 d̚	娘 ŋ
唇音	重唇	幫 p	滂 p'	並 b	明 m
	輕唇	非 f	敷 f'	奉 v	微 ε
齒音	齒頭	精 ts 心 s	清 ts'	從 dz 邪 z	
	正齒	照 t̚ç 審 ç	穿 t̚ç'	牀 dz̚ 禪 z̚	
喉音		影 ʔ	曉 x	匣 δ	喻 j
半舌					來 l
半齒					日 nz

三十六母字圖								
來	影	照	精	非	幫	知	端	見
<small>全清 鄰連</small>	<small>全清 因煙</small>	<small>全清 真也</small>	<small>全清 津煎</small>	<small>全清 分春</small>	<small>全清 賓邊</small>	<small>全清 珍連</small>	<small>全清 丁顛</small>	<small>全清 經堅</small>
日	曉	穿	清	敷	滂	徹	透	溪
<small>全濁 人然</small>	<small>次清 馨軒</small>	<small>次清 真蟬</small>	<small>次清 親千</small>	<small>次清 芬蕃</small>	<small>次清 緝篇</small>	<small>次清 疾颯</small>	<small>次清 汀天</small>	<small>次清 輕牽</small>
	匣	牀	從	奉	並	澄	定	羣
	<small>全濁 刑賢</small>	<small>全濁 岬滂</small>	<small>全濁 春前</small>	<small>全濁 墳煩</small>	<small>全濁 貧便</small>	<small>全濁 陳纏</small>	<small>全濁 廷田</small>	<small>全濁 勤乾</small>
	喻	審	心	微	明	娘	泥	疑
	<small>全濁 寅延</small>	<small>全清 身瘦</small>	<small>全清 新先</small>	<small>全濁 文云</small>	<small>全濁 民綿</small>	<small>全濁 紉尼</small>	<small>全濁 寧年</small>	<small>全濁 銀研</small>
		禪	斜					
		<small>全濁 蕭清</small>	<small>全濁 蕭清</small>					
舌齒音	是喉音	正齒音	齒頭音	唇音輕	唇音重	舌上音	舌頭音	是牙音

2. 韻母

すでに述べたように、一つの音節は声母と韻母の二つの部分に分けられ、韻母とは字音の声母以外の部分のことである。例えば、「傷 [san]・寒 [xan]」では、[s]・[x] は声母^{注一}であり、[an]・[an] は韻母である。

注一：現代漢語で [s] は卷舌音の摩擦音、杜やシの子音。また [x] は舌根摩擦音、ハ行より強い子音。

韻母は単韻母と複韻母に二大分類される。現代漢語では単韻母は次の七つである。

[i]	：離 [li]	奇 [tçi]
[-i]	：詩 [si]	詞 [tçi] ^{注一}
[u]	：路 [lu]	途 [t'u]
[y]	：紆 [y]	徐 [çy] ^{注二}
[a]	：巴 [pa]	麻 [ma]
[ɤ]	：哥 [kɤ]	澤 [tsɤ] ^{注三}
[ə]	：兒 [əI]	二 [əI] ^{注四}

注一：破擦・摩擦齒音（拼音 z、c、s）や卷舌音（zh、ch、sh、r）を自然に発音したときに聞こえる元音で [i] と [u] の中間の音。

注二：拼音 u、イを発音する舌の位置でウのように唇を丸く発音する。

注三：拼音 e、エを発音する唇の位置でオを発音する。

注四：[ɤ] を発音したあと舌先を巻き上げ「アル」のように発音する。

複韻母のあるものは韻頭を加える。韻頭には [i、u、y] 三種がある。

[i] 頭	：家 [tçia]	街 [tçiɛ]	
[u] 頭	：瓜 [kua]	果 [kuo]	婆 [p'uo]
[y] 頭	：雪 [çye]	原 [yan]	

あるものは韻尾を加える。普通話では韻尾は [i、u、n、ŋ] の四種である。例を挙げると、

[i] 尾	：蔡 [ts'ai]	雷 [lei]
[u] 尾	：曹 [ts'au]	周 [tsou]
[n] 尾	：陳 [tʂan]	韓 [xan] ^{注一}

[ŋ] 尾 : 程 [tʂaŋ] 唐 [taŋ] 注二

注一 : 元音を発音して舌尖を上顎につけ、「案内」のアンのようにいう。

注二 : 元音を発音して舌を奥に引き付けて息を鼻から出す。

あるものは韻頭のみならず韻尾をも加える。例を挙げると、

[uai] : 懷 [xuai] 帥 [suai]
[uei] : 帰 [kuei] 水 [suei] (拼音~ui)
[iau] : 挑 [tiau] 妙 [miau] (拼音~iao)
[iou] : 流 [liou] 求 [tʂiou] (拼音~iu)
[iɛn] : 連 [liɛn] 先 [çien] (拼音~ian)
[uan] : 関 [kuan] 鑽 [tsuan]
[yan] : 卷 [tçyan] 玄 [cyan] (拼音~üan)
[uen] : 寸 [tsuen] 論 [luɛn] (拼音~un)
[iaŋ] : 良 [liaŋ] 祥 [ciaŋ]
[uaŋ] : 黄 [xuaŋ] 広 [kuaŋ]
[iuŋ] : 窮 [tçiuŋ] 雄 [çiuŋ] (拼音~iong)
[ueŋ] : 翁 [ueŋ] (拼音~weng)

われわれが詩を作るときは韻部を検討して押韻する。韻部は韻母とは異なるもので、韻母は(もし韻頭がある場合)韻頭を包括し、韻部は韻頭を包括しない。韻頭の異なる字であっても、ただ主要元音(もし韻尾がある場合)と韻尾が一致していれば、すなわち韻部が一致して、押韻することができるのである。例を挙げると、

晝出耘田夜績麻 (ma) 昼出て田を耘し夜は麻を績ぎ
村莊兒女各當家 (tçia) 村莊の兒女 各々家に当たる
童孫未解供耘織 童孫は未だ耘織に供するを解せざるも
也傍桑陰學種瓜 (kua) 注一 也た桑陰に傍って種瓜を学ぶ (苑成大「田家」詩)

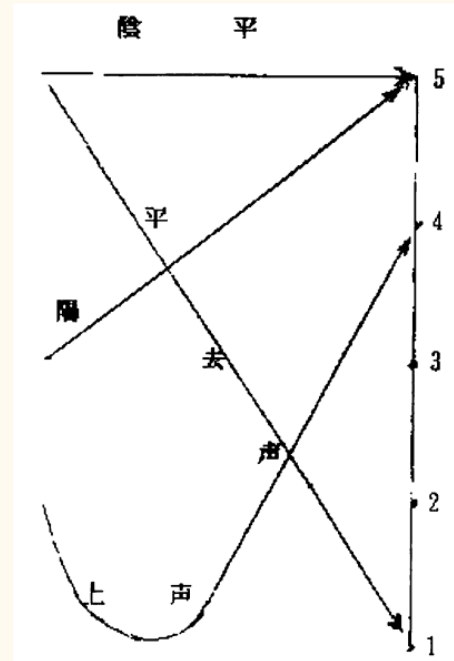
以上に述べたのは現代漢譜の韻母系統についてである。古漢語の韻母系統については「第4節一韻書について」で紹介するのでここではふれない。

注一 : 第一節三頁注二参照、七言絶句なので一二四句末字が押韻する。

3. 声調

普通話^{注一}には全部で四つの声調^{注二}がある。すなわち陰平声（「媽」^{注三}の類）、陽平声（「麻」^{注四}の類）、上声（「馬」^{注五}の類）、去声（「罵」^{注六}の類）である。声調の違いは語音の高低昇降の違いによっている。これは相対的な音程であって、絶対的な音程ではないので、波長を確定することはできないが、その高低昇降の形状を右図のように描写することができる。

唐詩の伝統^{注七}によれば韻部と声調が不可分のものであり、声調の異なる字は一般に相互に押韻できないことになっている。元曲^{注八}の伝統では声調が異なる字であっても押韻することができる。現在多くの民謡では唐詩の伝統に従い、特に平声で押韻する傾向が強くある。古典芸能では元曲の伝統に従って、四声を通じて押韻する。



唐詩の伝統^{注七}によれば韻部と声調が不可分のものであり、声調の異なる字は一般に相互に押韻できないことになっている。元曲^{注八}の伝統では声調が異なる字であっても押韻することができる。現在多くの民謡では唐詩の伝統に従い、特に平声で押韻する傾向が強くある。古典芸能では元曲の伝統に従って、四声を通じて押韻する。

注一：1955年、全国文字改革会議により制定された北京語を標準音とし、現代白話文を文法規範とする現代中国の共通語。

注二：日本語の高低アクセントはピアノ音のような段階移動式であるが、声調はバイオリンのように切れ目なく昇降し、昇降の型によって分けられる。「四つの声調」とは高く平らな型（第一声・陰平）、低いところから急に上がる型（第二声・陽平）、低くてくぼんだ型（第三声・上声）、高いところから急に下がる型（第四声・去声）をいう。

注三：「媽 [mā]」はお母さん。「口をアーンと開いて」の「アーン」のように一番高く（5）平らに発音する。

注四：「麻 [má]」は胡麻など。「エー？何だって？」の「エー」のように普段の高さ（3）から尻上がりに発音する。

注五：「馬 [mǎ]」は動物の馬。「へーエ！そうかねえ」の「へーエ」のようにふだんより低い音（2）から、ぐっと下げて軽く尻上がりになる。

注六：「罵 [mà]」は悪口を言う。「さあ、出発！」の「さあ」のように一番高いところから急に下がる。

注七：「唐詩の伝統」とは近体詩の押韻法がほぼ一定する唐代（618～907）の平水韻部を規範とする押韻規則のこと。

注八：十三世紀前半に起こり元朝一代を風靡した雑劇文芸、作者90人、700名が知られ、200種が現存する。

古漢語の声調系統と現代漢語の声調系統は異なる。古漢語には四つの声調、すなわち平声、上声、去声、入声があった^{注一}。現代普通話では古平声が陰平と陽平に分かれ、古入声は消失してしまった^{注二}。次の一首の唐詩はもとは入声で押韻していた^{注三}ものである。

千山鳥飛絶　　千山　鳥飛ぶこと絶え
萬徑人蹤滅　　万径　人蹤　滅す
孤舟蓑笠翁　　孤舟　蓑笠の翁
獨釣寒江雪　　独り釣る　寒江の雪　——（柳宗元「江雪」詩）

現代普通話では「絶」は平声（陽平）になり、「滅」は去声に読まれ、「雪」は上声になって昔と合わなくなってしまった^{注四}。現代では入声は多くの方言に残るに過ぎないが、そこでわれわれは現代方言によって入声に関する知識を得て、古代音韻学を理解することができる。

注一：梁の沈約（441～513）が『四声譜』を著したことが『梁書』に見え、空海『文鏡秘府論』などに引用される。「平常去入配四方、東方平声、南方上声、西方去声、北方入声」云々。

注二：入声は-p、-t、-kなどの閉じ音節のことだが、十一世紀の濁音の消失に続いて入声も開き音節となり消滅した。

注三：満目蕭条たる雪景色のきびしい美しさを際立たせることに成功しているため、読者の生理と心情に、ある種の清潔で鮮明な感動を引き起こす効果を上げている。絶・滅・雪という短く促った入声の韻字が、そうした詩的心象のあり方を形式の面からささえている。（松浦友久）

注四：「絶」は jué、「滅」は miè、「雪」は xuě である。

第3節——反切と双声・疊韻

1. 反切

中国では昔はローマ字は無く、漢字を用いて発音を注記した。『説文』のなかではいつも「読若某」^{注一}とし、後の人は「音某」^{注二}とするようになった。例えば『説文』では「辛、読若愆」^{注三}がある。また『詩経』周南・采芣篇「薄言掇之」^{注四}の毛伝「掇、

拾也」^{注五}に陸徳明『經典積文』は「拾、音十」^{注六}と注記する。このような注音方法を直音という。

直音はきわめて局限性があり、ある字に同音の字が無い場合には注音することができない。例えば普通話の「丟」(diū)の字^{注七}は同音の字で注音することができない。

またある字に同音の字があっても、その同音の字があまりにも見慣れない字だった場合には直音を注記しても注記しないのに等しい。例えば『康熙字典』に「窮、音窮」^{注八}とあるのがそれである。

注一：「読んで某の若し」、「読若」法という注音方式で、後漢に出現。『説文解字』では現行の同音を形声字に求めて注音した。

注二：「音は某」、後漢末に出現した「直音」という注音方式。

注三：『説文解字』三編上「言部」、「辛」は「辜」(罪)の古い形で、「愆」も「過ちを犯す」という意味がある。

注四：茺苢はオオバコ、強陰益精の効があるので子求めにこの草を摘んだ。「薄らく言に之を擲る」。

注五：秦末～漢初の魯の人・毛亨による『詩経』注。

注六：陸徳明(550～630)は『毛詩音義』三巻をふくむ『經典積文』三十巻を著した。

付記：戦国末から前漢に現れた陰陽五行説を奉じる集団は同音・近音を用いて字義説明とする「声訓」を意図的に行い、影響を残した。「直音」はこのような字義解釈から離れた注音方式である。

注七：元代から見える比較的新しい字で意味は「①失う、②投げる」。

注八：現行の『康熙字典』にこんなことは書いていない。『集韻』を引いて「音弓」とするのみである。

また直音に大変近い注音方法があり、それは同音で声調の異なる字を用いて注音するのである。例えば「刀」字に『康熙字典』は注して「到平声」とする^{注一}。「刀」字は平声であるが、「到」字は去声の字である。「音到」では正しくないが、必ず「到」字を平声を読むとすれば「刀」字の音が得られるわけである。このような注音方法は直音に比べて進歩している。見慣れない字を用いることを避けるために常用字を用いることができる。しかし、まだ声調を変えて初めて字音ができるという欠点がある。

反切というのは昔の表音方法で、前述の二種の方法に比べて大きな進歩がある。反切の方法はおおよそ漢末に始まった^{注二}。現在見られる漢代の反切は応劭の『漢書』注が最も早い。魏・晋の後に反切方法は大変流行した。^{注三}はじめのころ「反」と呼ばれたが、唐代に諱の「反」字^{注四}を避けて「切」というようになった。「反」と「切」とは名称は異なるがその実は表音するという意味である。上字が「反」で下字が「切」であると思う人

がいるが誤解である。「反切」という言葉が用いられたのは宋朝に始まり、南宋・魏了翁の『師友雅言』で最初に出現した^{注五}。

注一：これは『正韻』を引く。

注二：『爾雅』積草の「艾、氷臺」は氷の古音「凝」と「臺」の合声によって「艾」の字音を表したという説がある。

注三：魏晉南北朝の言語遊戯に「反語」があった。二文字を上から下に合声して一字とし、また下から上に合声してもう一字を作る。劉宋の明帝は劉忱を反語によって臨讐とした。劉忱の合声が臨、忱劉の合声が讐である。反語の起源は後漢中期にさかのぼるといふ。

注四：不明。

注五：『漢語大詞典』二卷又部「反」字の【反切】では「宋の趙彥衛『雲麓漫鈔』卷十四に「孫炎が始めて反切の語を為した」とある」といふ。孫炎は鄭玄門下の三国・魏の学者。

反切の方法は二つの字を用いて一つの音を表出するもので、反切上字は「声」を、また反切下字は「韻」と「調」を表す。したがって上字は反切される字と必ず同声母でなければならないが韻母と声調は問題にならない。下字は反切される字^{注一}と必ず韻母・声調を同じくせねばならず、声母は問題にならない。例えば、

光：古皇切

「古」と「光」は声母が同じであり、「皇」と「光」は韻母と声調が同じである。「古」の声母を「皇」の韻母と声調に加えることで、「光」字の音（声・韻・調）を切出する^{注二}ことができる。

$$\text{光} \left[\begin{array}{l} \text{古 } k(u) \\ \text{皇 } (o) \text{ uaŋ} \end{array} \right] \text{ } k + \text{uaŋ} = \text{kuaŋ} \text{ (guang)}$$

上の例を分析すると次のようなことがわかる。まず反切上字は声調を問題にされない：「光」は平声、「古」は上声^{注三}。そして反切下字は清濁を問題にされない：「光」は清音、「皇」は濁音^{注四}。

反切法は漢末および六朝人の注解・音義・字書^{注五}において多く用いられ、隋・唐・宋代の韻書^{注六}で集大成された。後世にも多くの字書・字典は反切法を用いて注音しており、その結果、我々は古典を読むときに字書・韻書・字典を利用するとなると、反切法の知識なしには正確に理解することができないのである。

注一：反切帰字、あるいは被切字と呼ぶ。表音される字。

注二：『漢語大詞典』刀部「切」に「【切字】即ち反切。二字を用い併せ別の一字の読音を切出す」とある。上字の声母と下字の韻母・声調を切合することを言うか。また「宋・高承『事物紀原』経籍芸文・切字：…切字本出於西域。漢人訓字、止曰「讀如某字」、未用反切。然古語已有二聲合爲一字、如「不可」爲「^{べからず}叵」、「如是」爲「^{しかく}爾」、「而已」爲「^{のみ}耳」、「之乎」爲「^{これか}諸」（之＋乎 / 疑問・感嘆の語気、之＋於 / 場所・対象の介詞もある）之類、似西國二合音、蓋切字之原也。「西域・西國」は印度のことで、沈括『夢溪筆談』にも「音韻之學、自沈約爲『四聲』、及天竺梵學入中國、其術漸密」とある。「梵學」は梵字学。

注三：「光」の中古韻母は平声唐韻、「古」は上声姥韻。

注四：「光」の中古声母は見で全清牙音、「皇」は匣で全濁喉音。

注五：「注解」は後漢末の服虔・応劭の『漢書』注、西晋の杜預の『春秋左氏伝』注などを指し、「音義」は字音・字義の注釈をいい、陳～唐の人、陸德明（550～630）の『經典積文』三十卷は『周易音義』以下十四部音義の総称である。「字書」は梁の顧野王『玉篇』など。

注六：「韻書」は第四節で詳しく解説される、韻母・声調配列の字書。

反切法にはまた限界がある。反切上字はただ声母を表すので輔音だけを表示する漢字を専用すればよいのだが、しかし実際上は一個の漢字はすべて一個の音節を表すので、単純に輔音のみを表す漢字は存在しない。反切下字は韻母を表すもので、元音さえ表示すればよいのだが、しかし元音開頭（二・一）の漢字はとても少なく、常々輔音開頭の字を借りて反切下字としないわけには行かなくなる。かくして我々は反切を運用するとき、必ず反切上字の韻母を取り去り、また反切下字の声母を取り去って初めて正確な読音を取り出すことができるのである。

さらに語言発展によって引き起こされた古今音の相違のため、上述の原則に照合して「切」しただけでは、まだ正確な読音を得られない場合がある。古今音の相違についてはこの一章を全部学んで初めて概括的に理解される。以上に述べたことに関して二例を挙げよう注一。

一、宋代以前は平声が陰陽に分化しておらず、それゆえに陰平声の字で陽平声の字を切ることができたし、また陽平声の字で陰平声の字を切ることができた注二。例えば、

竜、力鏡切。 今音では竜は陽平、鏡は陰平。

慈、疾之切。 今音では慈は陽平、之は陰平。

徒、同都切。 今音では徒は陽平、都は陰平。 （以上は陰平で陽平を切する）

注一：以下本書では「今」とは現代漢語音、「古」とは中古漢語音を指す。通常は本書第六節で述べるように先秦～漢代の語音系統（上古漢語音）を古音、六朝・隋・唐代の語音系統（中古漢語音）を今音と称する。

注二：「宋代の声調は晩唐・五代の声調と同じで、すなわち平上去入の四声であった。宋代に平声が陰陽に分かれていなかったことは、朱熹の反切によって証明される。（…）元代の声調は漢語声調の大転換で、古代の平上去入の四声が陰陽上去の四声に変わった」（王力『漢語語音史』）

公、古紅切。 今音では公は陰平、紅は陽平。
恢、苦回切。 今音では苦は陰平、回は陽平。
新、息鄰切。 今音では新は陰平、鄰は陽平。（以上は陽平で陰平を切する）

二、普通話の [tɕ (j) · tɕ' (q) · ɕ (x)]^{注一}の一部は古代の [k · k' · x]^{注二}に由来する。吳方言^{注三}の一般状況によるならばこれらの [tɕ · tɕ' · ɕ] はすべて [k · k' · x] に由来する。古代反切中のこれらの [tɕ · tɕ' · ɕ] の字を読むときには [k · k' · x] にしなければならない。例えば、

雞、古奚切。 今音では雞 [tɕ]、古 [k]。
契、苦計切。 今音では契 [tɕ']、苦 [k']。
奚、胡雞切。 今音では奚 [ɕ]、胡 [x]。

こうして（限界を開くために）、明・清代の音韻学者は反切方法に対していくらかの改変を加えた。例えば、

先：『広韻』では「蘇前切」である。

潘耒の『類音』^{注四}は「薛煙切」に改めた。

『音韻闡微』^{注五}（原注：清李光地等奉勅編撰）は「息煙薛」に改めた。

『類音』と『音韻闡微』では入声字の「薛・息」を平声字の「蘇」に替えて反切上字とし、零声母で陰平声の「煙」をもって「前」に替え、反切下字とした。

注一：舌面音（二・一）である。括弧内は拼音字母表記。

注二：[k · k'] はそれぞれ全清牙音（見）、次清牙音（溪）。[x] は次清喉音（曉）。「清代後期に二十三の声母となったのは [tɕ · tɕ' · ɕ] の三声母が増加したのである。（…）これは見系 [k · k' · x] から分化してできたのである。」（王力『漢語語音史』三九四頁）

注三：上海をふくむ江蘇省の一部と浙江省の大部分で用いられる方言。

注四：潘耒（1645～1719）の『類音』八巻は音韻学書。

注五：1726年に成る音韻学書、十八卷。反切法を改良して上字は鼻音韻尾のないもの、下字は清音は影母、濁音は喻母を用いる。

このように「薛煙」または「息煙」とすれば速く読むことができ、すぐに「先」の音が切出できる^{注一}。あきらかにこれは一種の改良進歩と言えよう。しかし零声母の字はそれほど多くはなく^{注二}、そのために見慣れない字を反切下字に用いる必要が生じ、これによって一種の人為的困難が出現する。例えば、

『類音』に「中、竹确^{注三}切」とある。

「中」は常用字であるが「确」は皆に知られない。このように皆に知られない字で常用の「中」字を切するのは、実用価値を欠いていると言えよう。より新しい『音韻闡微』ではこのような欠点を免れることはできたが、漢字だけで表音しようとする限り、いかなる改良進歩を加えるかを論じるまでもなく、一定の限界につき当たるといものである。例えば「u」を韻母とする字は零声母の字を反切下字にすることができない^{注四}。

こうした限界を打ち破るために拼音字母が創造される必要があった。

1913年、「読音統一会」は一種の拼音字母の性質を帯びた注音字母^{注五}を制定し、双拼法を発展させて三拼法に至り、漢字の束縛を脱出して音素化への第一歩を踏み出した。

解放以後、「文字改革委員会」は「漢語拼音方案」を制定して、初めて漢字注音問題を完全に解決した^{注六}のである。

注一：明・清代には入声は消失しているので韻尾輔音が零声母と合声する心配がないし、また零声母を用いることで声母を取り去る必要がない。

注二：「【零声母】元音開頭で前面に輔音のない音節の声母を指す。」(『古漢語知識辞典』)。実際には前項注五で述べたように影母・喻母が用いられたので、厳密に零声母の次を用いたのではなかった。また現代漢語では零声母は影母に入れられる。

注三：『玉篇』「於宮切、石名。」

注四：例えば「烏」(wu)は呉母。

注五：反切の声／韻調の双拼法に対して注音字母は字頭輔音・主要元音・字尾輔音の三つの記号を用いる三拼法である。

注六：1958年制定、ラテン字母により、漢字・普通話教育の補助、国際文化交流、索引問題の解決などを目的とした。

2. 双声・疊韻

二字の声母が同一のものを「双声」といい、また二字の韻母が同一のものを「疊韻」という。例えば、

双声：唐棣 流離 踟躕 勇躍 沙参 転倒 参差 鼯勉 琵琶 珍珠 伶俐
美満 枇杷^{注一}

疊韻：崔嵬 扶蘇 芍薬 綢繆 紛紜 逍遙 蒼茫 朦朧 葫蘆 橄欖 希奇
螳螂 蓀蓉^{注二}

「美満 [meiman]」についていえば、いずれの声母も「m」であり、音韻学上これは「双声」といわれる。「螳螂 [taŋlaŋ]」の場合は韻母がいずれも「aŋ」であり、音韻学上これは「疊韻」といわれる。「疊韻」においては韻部が同一であるのに過ぎず、韻頭までが同一であるのではない。「綢繆 [tʂoumiou]」では「綢」字には韻頭がなく、「繆」字には韻頭「i」がある。

今日我々には拼音字母があるので、双声・疊韻は容易に理解することができる。しかし古代には双声・疊韻を理解することは決して容易なことではなかったのである。

注一：「唐棣」棠棣、常棣とも書く木名。

「流離」瑠璃、光り輝くさま、涙が流れ落ちるさま、さまようこと。

「踟躕」水時計、連なる、ためらう、徘徊する。

「踊躍」勇躍、身を躍らせる。

「沙参」草名、知母、ユリ科ハナスゲ。

「転倒」顛倒、顛到、反転する、錯乱する。

「参差」ふぞろい、鳳凰の翼がふぞろいなのにちなみ笙のこと。

「鼯勉」つとめはげむ。

「琵琶」外来語、楽器の名。

「珍珠」真珠。

「伶俐」かしこい。

「美満」美しい。

「枇杷」枇杷に似た実の成る木名。

注二：「崔嵬」高い岩山、聳えるさま、胸中穏やかでない。

「扶蘇」扶疏、木が茂る。

「芍薬」薬名。

「綢繆」まつわりつく。
「紛紜」盛んである。
「逍遙」招揺、常羊、倡佯、自適して楽しむ。
「蒼茫」果てしなく広がる、ぼんやり霞む。
「朦朧」ぼんやり霞む、不明瞭。
「葫蘆」ひょうたん。
「橄欖」オリーブ。
「希奇」めずらしい。
「螳螂」かまきり。
「菴蓉」松容、薬名。

第4節——韻書

現存する韻書の中では『広韻』が最も早い時代に完成したものである。『広韻』の語音系統は基本的に『唐韻』に基づいており、また『唐韻』の語音系統は基本的に『切韻』に基づいている。

『切韻』は隋の陸法言が著したもので(601年)、現在ごく一部の残巻しか残っていない^{注一}。『唐韻』は唐の孫愐が刊定したもので(751年)現在ではやはり一部の残巻しか残っていない。

『広韻』は宋の大中祥符元年(1008年)に成書したもので、陳彰年・邱雍らが詔を奉じて重修したものなので『大宋重修広韻』と呼ばれる^{注二}。

注一・二：『切韻』せついん 『広韻』こういん 隋・仁寿元年(601)に陸法言を主編者として編定された韻書である。その序文によると、隋の開皇(581～600の年号)の初めに、音韻問題に造詣の深い同志八人が、陸法言の家に集まって、酒をくみつつ南北古今の韻書について、よしあしを論じ、適切な反切を選び、ずれのある反切を除くうち、いつしか理想的な韻書の概要ができたので、陸法言はそれを筆記しておき、それをもとに編定した。八人のうち、ことに顔之推・蕭該二人の意見を尊重したという。『切韻』はその内容を全面的にうかがい知ることのできる最古の韻書である。詩文押韻の標準として採用され、それ以前の六朝期の諸韻書を圧倒したが、唐代にはいと、『切韻』原本に文字や注解が増加せられた。増訂のおもなものには長孫訥言の

『切韻箋注』、王仁昫の『刊謬補缺切韻』、孫愐の『唐韻』、李舟の『切韻』などがあり、最後に（それらの過程の最後のものとして）北宋の陳彰年らが勅命によって撰定した『広韻』が現れて、王仁昫本を除く他のものは散逸してしまった。（…『広韻』は）清初に至って顧炎武が明の宮廷の蔵本の中よりこれを発見して刊行し、やや遅れて択存同本が刊行された。（『中国語学新辞典』）

韻書を編纂する目的は文学の創作である。韻部を綱としているので詩人が韻によって詩を吟じるのに便利であり、一系列の同音字をいっしょに並べ、その最初の字の下に反切を明記して人々の方言や誤読を正すのである。韻書にはまた簡単な詞義解釈があり、辞典としての役割もはたしているが、それでも主要な役割は音韻分野にある。

広韻韻目表

平上去入	平上去入	平上去入
1 東董送屋	22 諄準稕術	43 唐蕩宕鐸
2 冬○宋沃	23 臻○○櫛	44 庚梗映陌
3 鐘腫用燭	24 文吻問物	45 耕耿諍麥
4 江講絳覺	25 殷隱焮迄	46 清靜勁昔
5 支紙寘○	26 元阮願月	47 青迥徑錫
6 脂旨至○	27 魂混慁沒	48 蒸拯證職
7 之止志○	28 痕很恨○	49 登等嶝德
8 微尾未○	29 寒旱翰曷	50 尤有宥○
9 魚語御○	30 桓緩換末	51 侯厚侯○
10 虞麌遇○	31 刪潛諫黠	52 幽黝幼○
11 模姥暮○	32 山産禡鐸	53 侵寢泌緝
12 齊薺霽○	33 先銑霰屑	54 覃感勘合
13 ○○祭○	34 仙獮線薛	55 談敢闕盍
14 ○○泰○	35 蕭篠嘯○	56 塩琰豔葉
15 佳蟹卦○	36 宵小笑○	57 添忝栻帖
16 皆駭怪○	37 肴巧効○	58 咸賺陷洽
17 ○○夬○	38 豪皓号○	59 銜檻鑑狎

18灰賄隊○	39歌哿箇○	60嚴儼釅業
19哈海代○	40戈果過○	61凡范梵乏
20○○廢○	41麻馬禡○	
21真軫震質	42陽養樣藥	(二〇六韻)

唐・宋の韻書（訳注：切韻系韻書）の中において、声調は韻部の構成要素であり、声調が異なれば韻部も異なるために二〇六韻となった（訳注：『切韻』では一九三韻）。もし声調の不同を計算に入れず、四声に共通のものを分けた場合には六十一類となる（訳注：前頁図参照）。

ではこれらの六十一類は当時のある一地方（例えば長安）の実際の発音と一致していたのであろうか。答えは否である。章炳麟のいうように「『広韻』は古今の諸地域を包括していた」のである。『切韻』（『広韻』を含んでいう）がすでに意図的に記述していた古音系統や地域音系統は、われわれが上古音系統や現代緒方言を研究する際の有力な資料である。

現在われわれは『広韻』に「独用^{注一}」と「同用^{注二}」の記述を見るが、これは唐初の許敬宗が『切韻』のために作った注に由来している。これによって当時の詩人たちは実際の発音によって押韻しており、また『切韻』のような細かい分類を必要としなかったことがわかる。

『広韻』に「独用・同用」が明記されるようになると、おのずから同用の韻を合併しようという人も現れた。南宋淳祐12年（1252）、江北平水の劉淵は『壬子新刊礼部韻略』一部を編著し、書中に一〇七韻を分けた。その後、別の韻書を根拠とし、一韻を合わせて一〇六韻とした^{注三}。現在いわゆる「詩韻」また「平水韻」はこの一〇六韻のことである。

注一：【独用】 ある一つの韻の字が、詩を作るときに同韻部の字とだけ押韻し、ほかの韻部の字と押韻することがないことをいう。『広韻』はある韻がほかの韻と「同用」されることを注記する一方で、べつのある種の韻にただ「独用」されることを注記している。たとえば上声第因十七「寢」韻や去声第八「未」韻にはいずれも「独用」という注記がある。

注二：【同用】 二つあるいはそれ以上の韻に所属する字が、詩を作るときに互いに相押韻されることをいう。『広韻』およびその前代の韻書分韻が細かく、当時の実際の発音では区別されないものもあったので「同用」と注記された。上声第二十五「潛」韻の下には「産同用」と注し、ま

た去声第五「寘」韻の下には「至・志同用」と注する。

注三：金・王文郁『平水新刊札部韻略』（1229年刊）は宋の『札部韻略』（1037年刊）の同用韻を合併して一〇六韻とした。

上声「二十八琰」は、後に清の仁宗の諱（訳注：嘉慶帝の名・顥琰）を避けて「二十八儉」に改められた。去声「二十四敬」は『切韻』の旧韻目であったが『広韻』では宋諱を避けて「映」韻に改められており、『佩文韻府』で原名を回復された。「業」韻を『平水韻』が「洽」韻に入れているのは錯誤によるもので、いま邵長衡『古今韻略』によって改める。

韻書は元代に至って、また一種の「曲韻」（訳注：作曲に使用される韻）の出現を見た。元・

泰定元年（1324）、周德清の『中原音韻』^{注一}、これは韻書の重大な改革であった。『中原音韻』と「平水韻」を分けるポイントは三点が有る。

第一に、平水韻は『広韻』の韻部をそのままいくつかずつ合併してできたものであったが、『中原音韻』では一歩進めて平水韻の韻部を大都（今の北京）の実際の語音系統に照合して整理した。

〔韻母表〕『漢辞海』一六三五頁より

(再構音)	《広韻》韻目	《詩韻》韻目	(再構音)	《広韻》韻目	《詩韻》韻目
	(平上去入)	(平上去入)		(平上去入)	(平上去入)
oŋ, ioŋ / ok, jok	東董送屋	東董送屋	iæn / iæt, iuæt	先銑霰屑	先銑霰屑
uŋ / uk	冬 宋沃	冬腫宋沃	iæn, iuæn, iuæn	仙彌線薛	
juŋ / juk	鍾腫用燭		/jæt, juæt		
oŋ / ok	江講絳覺	江講絳覺	iæu	蕭篠嘯	蕭篠嘯
i, iui	支紙寘	支紙寘	iæu	宵小笑	宵小笑
i	脂旨至		au	肴巧効	肴巧効
i	之止志		au	豪皓号	豪皓号
iəi, iuəi	微尾未	微尾未	a	歌哿箇	歌哿箇
io	魚語御	魚語御	ua, iua	戈果過	戈果過
iu	虞虞遇	虞虞遇	a, ia, ua	麻馬碼	麻馬碼
u	模姥暮		iɑŋ, iuɑŋ / iak	陽養漾業	陽養漾業
iæi, iuæi	齊齊霽	齊齊霽	juak		
iæi, iuæi	祭		aŋ, uaŋ / ak, uak	唐蕩宕鐸	
ai, uai	泰	泰	eŋ, ueŋ / ek, uek	耕耿靜麥	庚梗敬陌
ai, uai	佳蟹卦	佳蟹卦	iɛŋ, iuɛŋ / iɛk, iuek	庚梗敬陌	庚梗敬陌
uai	灰賄隊	灰賄隊	iŋ, iuiŋ / ik, iuik	青迥徑錫	青迥徑錫
ai	哈海代		iəŋ / iək, iuek	蒸拯證職	蒸 職
iəi, iuəi	麌		eŋ, ueŋ / ek, uek	登等燈德	
in / it	真軫震質	真軫震質	iou	尤有宥	尤有宥
juin / juit	諄準稕術		ou	侯厚候	
juæn / juæt	文吻問物	文吻問物	iou	幽黝幼	
in / it	殷隱焮迄		im / ip	侵寢沁緝	侵寢沁緝
iɛn, iuɛn / iɛt, iuɛt	元阮願月	元阮願月	am / ap	覃感勘合	覃感勘合
uen / et, uet	魂混恩沒		jæm / jæp	談敢闞盍	
eŋ	痕很恨		iæm / iæp	鹽琰艷葉	鹽琰艷葉
aŋ / at	寒旱翰曷	寒旱翰曷	am / ap	添忝忝帖	鹽琰艷葉
uan / uat	桓緩換末			嚴儼釅業	
an, uan / at, uat	刪清諫黠	刪清諫黠	jem / jep	咸釅陷洽	咸釅陷洽
	山産禡黠		juem / juɛp	銜檻鑑狎	咸釅陷洽
				凡范梵乏	

第二に、平水韻では四声を分立しており、声調が異なれば韻部も異なるものであった。『中原音韻』では四声を通押し、声調が異なる字でも、ただ主要元音の韻尾が共通しさえすれば同じ韻部に入れられた。

第三に、十三・四世紀の大都音では平声がすでに陰陽に分かれ^{注二}、入声が消滅しており、古入声字はすべて陽平・上声、あるいは去声に入れられていた^{注三}。それまで輔音^{注四}韻尾であった入声韻は『中原音韻』では元音韻尾に改められた。

注一：江西出身の著者が北曲（元曲）創作のための用韻書として作ったもので、前巻「韻譜」と後巻「正語作詞起例」の二巻からなり、5876字を1600余りの同音字群に分け、反切・釈義はつけない。

注二：『中原音韻』は各部を「平声陰・平声陽・上声・去声」の四種の声調に分類するが、これは中世音の「平分陰陽」現象を反映しているといわれ、平声陰は現代音の陰平、平声陽は陽平に当たる。

注三：全濁声母→陽平、次濁→去声、清音→上声の「入派三声」をいう。

注四：原「鼻音」を改める。

『中原音韻』は次の十九韻母を部とする。

- | | | | |
|--------|------------------|--------|-------------------|
| 1. 東鍾 | uŋ, iuŋ | 11. 蕭豪 | au, au, iau |
| 2. 江陽 | aŋ, iaŋ, uaŋ | 12. 歌戈 | o, io, uo |
| 3. 支思 | i | 13. 家麻 | a, ua |
| 4. 齊微 | i, ei, uei | 14. 車遮 | ie, ye |
| 5. 魚模 | u, iu | 15. 庚青 | ən, iəŋ, uəŋ, yəŋ |
| 6. 皆夾 | ai, iai, uai | 16. 尤侯 | ou, iou |
| 7. 眞文 | ən, iən, un, yən | 17. 侵尋 | əm, iəm |
| 8. 寒山 | an, ian, uan | 18. 監咸 | am, iam |
| 9. 桓歡 | on | 19. 廉纖 | iem |
| 10. 先天 | ien, yen | | |

『中原音韻』の十九部は平水韻とはなはだしく異なるものである。これは決して70年間にこれだけ大きな変化があったことを意味するものではなく、重要なことは平水韻は守旧的であり、『中原音韻』は革新的であったということである。平水韻は詩作のために作られ

たので保守的であらざるをえず、また『中原音韻』は作曲のために作られたので「官韻」の制約に縛られることがなかった。『中原音韻』の十九部は現代北方曲芸（民族音楽）の十三韻^{注一}に非常に近く、改めて詳述することもない。

以上に、『広韻』・平水韻・『中原音韻』の韻母系統について述べたので、以下、簡単にそれらの声母系統について述べる。

『広韻』の反切上字から掃納すると、『切韻』時代の声母は三十六であったことが解る^{注二}。

注一：十三道韻ともいい、戯劇曲芸で用いられる十三韻類をいう。

一、中東（中冬） 二、江陽 三、衣期（一七） 四、姑蘇 五、懷來 六、灰堆
七、人辰（壬辰） 八、言前 九、梭波（梭滂） 十、麻沙（癸花） 十一、迭雪
十二、遙迢 十三、由求

注二：王力『漢語語音史』（1985）では隋—中唐音系（581～836）では舌上音「知・徹・澄」が分化しない三十三声母とし、それらの分化を『晋書音義』の唐・天宝年間（742～56）とする。

牙音：見 [k] 溪 [k'] 羣 [g] 疑 [g']

舌頭音：端 [t] 透 [t'] 定 [d'] 泥 [n]

舌上音：知 [ʈ] 徹 [ʈ'] 澄 [d] 娘 [ŋ]

唇音：幫（非） [p] 滂（敷） [p'] 並（奉） [b'] 明（接） [m]

齒頭音：精 [ts] 清 [ts'] 從 [dz] 心 [s] 邪 [z]

正齒音：莊 [tʃ] 初 [tʃ'] 牀 [dz] 山 [ʃ] 照 [tʃ] 穿 [tʃ']

神 [dz] 審 [ç] 禪 [ʒ]

喉音：影 [ʔ] 曉 [x] 匣（喻三） [ɣ] 余（喻四） [j]

半舌音：夾 [l]

半齒音：日 [ŋ]

『切韻』系統の三十六声母を守温の三十六字母と比較すると以下の三点が異なっていることがわかる。

一、『切韻』の唇音は重唇・輕唇を区別しておらず、「非敷奉微」は「幫滂並明」に併入されているが^{注一}、守温の字母は重唇・輕唇を分けている。錢大昕はかつて昔は輕唇

音がなかったことを証明した（第六節、古音について 参照）。これをみると『切韻』の時代には重唇音が軽唇音を分化していなかったことがわかる。『広韻』でも重唇音の字と軽唇音字は反切で互用されていることがわかる。

卑：府移切（卑は幫母、府は非母）

兵：甫明切（兵は幫母、甫は非母）

披：敷羈切（披は滂母、敷は敷母）

芝：匹凡切（芝は敷母、匹は滂母）

平：符兵切（平は並母、符は奉母）

明：武兵母（明は明母、武は微母）

靡：文彼切（靡は明母、文は微母）

注一：「非敷奉微」は軽唇音、「幫滂並明」は重唇音である。

二、『切韻』の正齒音は「照穿神審」と「莊初牀山」の二組に分かれていたが守温の三十六字母には「照穿牀審」の一組しかない。陳澧『切韻考』は正齒音を二類に分けており、これは切韻系統の実際の状況と一致する。等韻学では韻は四等に分けられる（第五節一等韻について 参照）が、正齒音の第一類は二等の上に出現し、また「照二・穿二・莊二・審二」とも「莊母・初母・牀母・山母」とも呼ばれる。第二類は三等の上に出現し、また「照三・穿三・神三・審三」とも「照母・穿母・神母・審母」とも呼ばれる。「禪母」は三等だけがあり、二等はないのでこの問題はない^{注一}。

現代漢語の中にもこの現象の痕跡が見られる。普通話において照系の二等の字は開頭が [ts, ts', s] であり、三等の字が開頭 [tʃ, tʃ', ʃ] であるのと区別されている。例を挙げると、

鄒 [tsou] は照二等、周 [tʃou] は照三等である。

搜 [sou] は審二等、収 [ʃou] は審三等である。

普通話だけにこのような例があるわけではなく、各地の方言にもいくたの同様な痕跡が残っている。例えば呉語に属する浙南の諸方言では「鄒・搜」は開頭 [ts, s] に読まれ、「周・収」は開頭 [tʃ, ʃ] に読まれる。

注一：王力『漢語語音史』は「照穿神審」を舌面音とし、また「莊初牀山」を舌葉音とする。

三、「喻母」は『切韻』字母では二・三等の二つに分かれ、三等のものは「喻三」、四等のもの「喻四」と呼ばれているが、「喻三」は「匣母」に併入され、また「喻四」は「余母」と呼ばれて守温の「喻母」とは区別されている。

さらに『中原音韻』の声母系統について述べよう。『中原音韻』の声母系統は現代普通話の声母系統とすでに非常に接近していた。明・蘭茂の『韻略易通』(1442年)^{注一}は「早梅詩」二十字を当時(十五世紀初)の標準語の声母系統としているが、『中原音韻』の声母が、まさしくこの二十音なのである。蘭茂の「早梅詩」は、

東風破早梅	東風 早梅を破り
向暖一枝開	暖に向かいて一枝開く
冰雪無人見	冰雪に人の見る事無きも
春從天上來	春は天上より来る

注一：『中原音韻』以後の北方語系統を代表する重要資料。声母二十類を一字ずつあてはめた五言絶句「早梅詩」は以後の多くの韻書に引用され、影響がすこぶる大きい。いま王力『漢語語音史』による発音部位を原著の表にカッコで補った。

いまこの二十声母を表にしてみると次のようになる。

牙音	：見 [k]	開 [k']	(舌根)
舌頭音	：東 [t]	天 [t']	暖 [n] (舌尖中)
重唇音	：氷 [p]	破 [p']	梅 [m] (双唇)
輕唇音	：風 [f]	無 [v]	(唇齒)
齒頭音	：早 [ts]	從 [ts']	雪 [s] (舌尖前)
正齒音	：枝 [tʃ]	春 [tʃ']	上 [ʃ] (舌尖後)
喉音	：向 [x] (舌根)	一 [j]	(舌面前)
半舌音	：来 [l]		(舌尖中)
半齒音	：人 [r]		(舌面前)

「早梅詩」の二十声母を現代普通話の二十二声母と比較してみると、以下の二点の問題が比較的明らかである。

第一、現代普通話に出現している一群の新しい声母 [tɕ, tɕ', ɕ] は「早梅詩」のころ

にはまだ独立していなかった。この一群の新しい声母には二種類の来源があり、一つは [k, k', x] から分かれて出ており、もう一つは [ts, ts', s] から分かれて出ている。例えば、

(舌根)	(舌尖前)
基 [ki→tçi]	疽 [tsy→tçy]
訣 [kye→tçye]	箭 [tsian→tçian]
欺 [k' i→tç' i]	妻 [ts' i→tç' i]
虚 [xy→çy]	西 [si→çi]

第二、現代普通話では [v] 母はすでに消失しているが、「早梅詩」ではまだ [v] 母があった。[v] 母が消失した後、半元音 [w] で開頭する字となり、また「喻、疑」の二母が合して一つになった。例えば、

亡 [vaŋ→waŋ]	= 王 [waŋ]
無 [vu→wu]	= 呉 [ŋu→wu]

この他、王力先生によれば「枝・春・上・人」はまだ卷舌音ではなく、清初にいたってこれらが卷舌音へと変化した可能性があるという。^{注一}

注一：王力『漢語語音史』は羅常培の『中原音韻』二十声母説に対して二十五声母説を支持している。詳細は同書309頁～320頁。

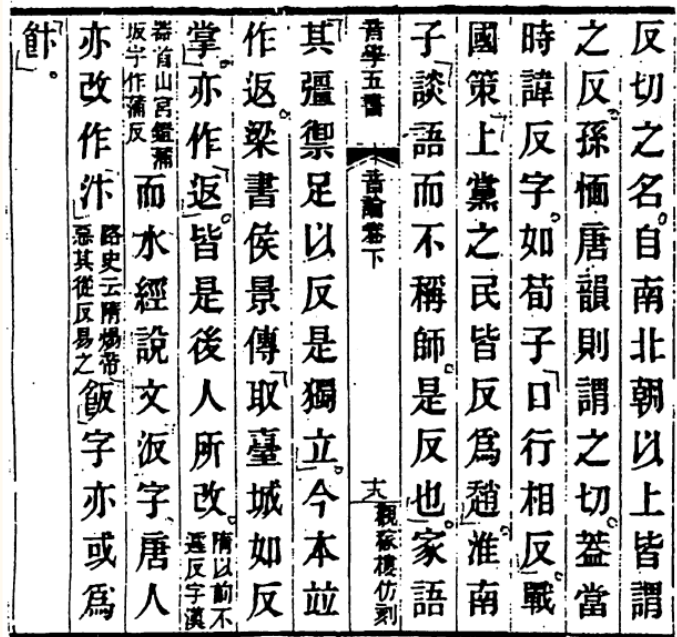
「唐人忌諱反字」について

『内経』誌141号「中国医籍音韻学 (三)」で「唐代に諱の反字を避けて切というようになった」(24頁) という箇所「不明」という注をつけたら荒川緑氏から親切なコピーが届いた。

清初の音韻学者・顧炎武 (1613~1682) の「音学五書」の筆頭で韻書の歴史などを述べた『音論』巻下にいう。

反切の呼称は南北朝以前はすべて「反」とっていた。孫愐の『唐韻』で「切」といったのは、あるいは当時「反」を諱字としたからであろう。

その例証として、『荀子』・『戦国策』・『淮南子』・『孔子家語』の旧本の「反」字がすべて「返」に変えられていたことを指摘する。さらに『水経』・『説文』の「返」字は唐代に「汁」に、また「飯」字は「食十」に変えられていたともいう。注に「隋の煬帝が反を旁とするのを嫌って変えさせた」という説を引く。



避諱改字は普通は帝室の祖廟に祭られる歴代皇帝および現皇帝の諱（本名）を避けるもので、例えば『黄帝内経明堂』の「太淵」が唐・高祖李淵の名を避けて楊上善注で「太泉」となる。実際の皇帝でなくとも、玄元皇帝と追証された老子の名が李耳とされることから、『黄帝内経明堂』楊上善序の「聞」字の耳が「身」に、また『難経集註』楊玄操序で「耽」字が「耽」に改められている例がある。

皇帝の名でなくとも、「反」字の場合は反乱を恐れた皇帝がその使用を禁じて諱字とされた歴史があったようである。

第5節——等韻学

等韻というのは反切方法の一種で、一種の反切図として表現され、一般には「等韻図」とも呼ばれる。前にも述べたように、昔の中国にはローマ字がなく、反切の方法をしっかりと理解することが困難であった。そこで等韻学家は当時にあつてはわかりやすい便法を

考え出し、三十六字母と二百六韻を配合して図式化し、すべての音節がそのどこにあるかをわかるようにした。図中の音節の発音さえわかっているならば、反切上下字の位置から割り出して、正確な発音を知ることができるのである。

現在ある韻書でこの上述の原則に完全に依拠しているものは二書あり、鄭樵の『七音略』と無名氏の『韻鏡』がそれである。その実、これらの二書はじつは同一の書であり、原名を『七音韻鑿』といった。「鏡」は「鑿」で、『韻鏡』は『韻鑿』であり、序文と等韻図の順序、個別のいくつかの文字を除けば『七音略』と『韻鏡』に異なるものは何もない。^{注一}

注一：『七音略』は南宋の学者鄭樵（1102～1160）の歴史書『通志』二百卷の「二十略」五十一卷（「六書略」「芸文略」「金石略」など語文資料が多い）に含まれる等韻図。『韻鏡』は張麟之の序文（1161年と1203年）を冠するもので作者・製作年不詳、日本にのみ伝わった。『七音韻鑿』は『七音略』序に「臣初得『七音韻鑿』、一唱而三嘆、胡僧有此妙義而儒者未之聞」とあることにより知られる韻図。『韻鏡』張麟之の序にも『指微韻鏡』という韻図名が挙げられる。

『七音略』と『韻鏡』の相違点は次の八点、①韻目順序、『七音略』が陸氏切韻系に『韻鏡』が李氏切韻系によるため、②重軽（『七音略』）と開合（『韻鏡』）の名称、③内外転の相違、④等列の不同、⑤声類の標目不同、⑥廢韻の寄入のしかたの不同、⑦鐸・藥韻の寄入のしかたの不同、⑧配列された若干の親字の不同。小結：『七音略』と『韻鏡』を一系統、『切韻指掌図』『切韻指南』を一系統とする。

これら二書は四十三枚の等韻図からなる。この四十三図は『切韻』を根拠として系統的に作成されたものである。『切韻』系統は当時の実際の語音系統を反映しておらず、また特にその後の語言の発展があったことから、元来の等韻図は適合しなくなっていた。そこで、四十三図は簡略化されて十六摂とされており、『四声等子』『切韻指南』はこうしてできた等韻図なのである。^{注二}この十六の名称は、

1. 通摂：「東・冬・鐘」諸韻を包括する。
2. 江摂：ただ「江」韻一部を包括する。
3. 止摂：「支・脂・之・微」諸韻を包括する。
4. 遇摂：「魚・虞・模」諸韻を包括する。
5. 蟹摂：「齊・祭・泰・佳・皆・灰・哈・廢」諸韻を包括する。
6. 臻摂：「真・諄・臻・文・欣・魂・痕」諸韻を包括する。
7. 山摂：「元・寒・桓・刪・山・先・仙」諸韻を包括する。

8. 效摂：「蕭・宵・肴・豪」諸韻を包括する。
9. 果摂：「歌・戈」諸韻を包括する。
10. 仮摂：ただ「麻」一韻を包括する。
11. 宕摂：「陽・唐」諸韻を包括する。
12. 梗摂：「庚・耕・清・青」諸韻を包括する。
13. 曾摂：「蒸・登」諸韻を包括する。
14. 流摂：「尤・侯・幽」諸韻を包括する。
15. 深摂：ただ「侵」一韻を包括する。
16. 咸摂：「覃・談・咸・銜・塩・添・嚴・凡」諸韻を包括する。

『四声等子』はこれを二十六図に表わし、『切韻指南』は二十四図にしている。『七

音略』『韻鏡』『四声等子』『切韻指南』以外にもう一つ大変大きな影響を残した等韻図があり、それは司馬光が作ったと伝えられる『切韻指掌図』である。注二『切韻指掌図』は二十図からなり、いま以下にその第一図を挙げる。

微	奉	敷	非	明	並	滂	幫	娘	澄	徹	知	泥	定	透	端	疑	羣	溪	見	一
				毛	袍	蒸	麥				孫	淘	餐	刀	教	○	尻	高		平
				茅	庖	胞	包	鏡	桃	肥	朝				擊	○	敲	交		
○	○	○	○	苗	○	○	鐘	○	晁	超	朝				○	香	趨	嬌		
				曇	飄	漂	○				○	迢	桃	貂	亮	翹	鄒	駢		
				務	抱	○	寶				惱	道	討	倒	嶺	○	考	蒿		上
				卯	飽	○	飽	膠	○	○	獠				咬	○	巧	絞		
○	○	○	○	○	蘆	蘆	表	○	肇	藻	○				鑄	鑄	○	矯		
				眇	掃	縹	縹				○	駟	肥	鳥	砲	○	砲	皎		
				帽	暴	○	報				願	導	韜	到	傲	○	饒	告		去
				貌	砲	砲	豹	撓	禡	趕	單				樂	○	敲	教		
○	○	○	○	廟	驕	剽	祿	○	召	眺	○				勳	○	矯	○		
				妙	○	○	○				○	屎	蓀	韜	弔	頰	鞫	駟		
				莫	泊	顛	博				諾	鐸	託	○	罕	○	恪	各		入
				適	電	璞	剽	擗	濁	連	斷				嶽	○	皎	覺		歸
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	巧				管	○	喙	却		
				○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○		

韻	日	來	喻	回	曉	影	禪	穿	牀	穿	照	斜	心	從	清	精	一
豪		勞	○	豪	蒿	鐘					○	騷	曹	操	糟		平
爻		甄	○	肴	越	韻	○	稍	巢	譙	騷						
宵		鏡	○	雞	○	鼻	妖	韻			○	昭					
蕭		聊	○	遥	○	脫	么				○	蕭	樵	鈇	焦		
皓		老	○	結	好	襖	○				○	嫂	卓	草	早		上
巧		○	○	○	○	○	○	數	應	爛	爪						
小		擾	○	○	○	○	天	紹			少	肇	○	○	○		
蘇		了	○	黨	晶	暁	宵										
號		螺	○	號	耗	奧	○	稍	巢	鈔	抓						去
效		○	○	効	孝	鞠	○	少	○	○	照						
笑		鏡	○	奈	○	○	要	邪									
咍		類	○	耀	○	歌											
鐸		落	○	涸	腫	惡	○					○	索	昨	錯	作	入
覺		陸	○	學	吒	挫	○	朔	泥	妮	捉						
藥		若	○	略	○	諱	約	約									
藥		○	藥	○	○	○											

注一：南宋以前の『四声等子』は作者不明、『切韻指南』の藍本とされる。後者は元の劉鑑著、序は1265年。

注二：司馬説は偽託とされ、宋代の韻母簡化現象を反映している。

宋・元代の韻図には「二呼・四等」がある。この「二呼」というのは、すなわち「開口呼」と「合口呼」のことで、またその「四等」というのはすなわち韻図中の同一類の声母・同一声調を分けて四類の字としたものである。先に挙げた『切韻指掌図』第一図(独)には開口呼の四等だけがあって、合口呼はない。

「高・交・嬌・驍」を例に挙げると、これは「見」母・平声の四等で、「高」は開口の一等、「交」は開口の二等、「嬌」は開口の三等、「驍」は開口の四等になる。この開口呼・合口呼は、後世のいわゆる開口呼・合口呼と完全に同じものではない。大ざっぱに言うならば、開口の一・二等が後世のいわゆる開口呼であり、開口の三・四等が後世のいわゆる齊齒呼であり、合口の一・二等が後世のいわゆる合口呼であり、合口の三・四等が後世のいわゆる撮口呼である^{注一}。この「二呼・四等」を略して「等呼」と称するが、これは等韻学の最重要概念であり、正確に理解されたい。

注一：「後世のいわゆる開口呼」とは韻母に介音のないもの、「齊齒呼」とは介音「i」を持つもの、「後世のいわゆる合口呼」とは介音「u」を持つもの「撮口呼」とは介音「ü」を持つものである。漢語において、声母と韻母の主要元音との間にある渡り音を「介音」という。現代漢語を例にとると、「天【tiən】」ではその音節構造において口むろの上下の開きを狭くするせばめの介音「i」が見られるが、これが齊齒呼である。つぎに「文【uən】」では、この音節の声母はなく（ゼロ声母という）、唇を丸くするまるめの介音「ü」が見られ、これが後世のいわゆる合口呼である。

また「学【çüé】」では、かつて存在した内破音韻尾（入声）が現代北京音では消失しているが、声母と主要元音との間に狭めと丸めが同時に行われる介音「ü」が見られ、これがすなわち撮口呼である。

声母	韻母		
	介音	主要元音	韻尾
t	i	ɛ	n
	u	ə	n
ç	ü	é	

等呼は韻頭の相違と主要元音の性質によって区分されている。宋・元代の二呼・四等は現在ではすでにその読音を推定することが大変困難になってしまった。しかし後世のいわゆる「四呼」では、この種の現象が現代語音の中にも依然として存在していることがわかる。

一、開口呼：韻頭がなく、かつ主要元音が「i, u, y」でないもの。

例「南【nan】」、「北【pei】」。

二、齊齒呼：韻頭「i」があるか、または主要元音が「i」であるもの。

例「九【tçiou】」、「七【tçi】」。

三、合口呼：韻頭「u」があるか、または主要元音が「u」であるもの。

例「黄【xuaŋ】」、「紅【xuŋ】」。

四、撮口呼：韻頭「y」があるか、または主要元音が「y」であるもの。

例「雪【çye】」、「雲【yn】」。

最後に、このような韻図をどのように利用して研究に役立てるかということが問題となる。われわれが字書を調べているか、またはさまざまな古典の書物の注釈を読んでいて、その中のある字の反切からすぐにその字の読音が得られなかったと仮定しよう。するとこれは、韻図の中から調べ出すことができるのである。韻図の調査方法はそれほど難しいものではない。『切韻指掌図』の付録につけられた明の邵光祖の「檢例」^{注一}を見ると、そこではわれわれに調査の方法を教えてくれている。「檢例（上）」にいう、


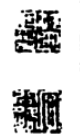

先づ上切の何れの母に居すかを求め、

次に引韻の去横を求めて捜せ。

字を偶然に見るも、また平上去入を

識らざるも尋ね求むべけん。

注一：邵光祖は『切韻指掌図』の最後の集成者たることしかわからない。

	檢例上		
先求上切居何母次求引韻去横搜	<small>且如</small>	<small>切東字須先求德字記在端字母下次求 紅字橫通至端字下即是東字它皆倣此</small>	本眼空時上下取此葉全無前後收見字
偶然又不識平上去入可尋求	<small>東董東 齊是也</small>	有照禪五母下韻居三等二相俦	<small>第一等 或無引</small>
<small>韻即用第三等引韻切第二等字 其音相近仄九切探之類是也</small>	檢例下	凡切字以上者為切下者為韻取同音同	母同韻同等四者皆同謂之音和取唇重
唇輕舌頭舌上齒頭正齒三音中清濁同	者謂之類隔		

まず反切上字がどの声母に属しているかを捜し出し、それから反切下字がどの韻図に属しているかを捜し出す。それからその韻図を縦横に調べて反切上字が属している声母があれば、われわれは反切されている読音を知ることができるのである。

例えば『詩経』王風「君子陽陽（あの人は晴れ晴れと）」にいう、

君子 陶々なり	あの人はのびのびと
左に <small>とう</small> 翻を執る	左手には羽のかざし
右に我を招くに <small>ごう</small> 敖由りす	右手で私を差し招く <small>注一</small>

この「翻」字の鄭玄注に「翻、徒刀反」とある。われわれはまず「徒」字が「定」母に属す（第三図にある）ことを調べ、それから「刀」字が「豪」韻平声一等に属す（第一図にある）ことを調べると、第一図の「定」母の下で豪韻平声一等の処を見て「淘」字を見出すので、この「淘」字が「翻」字と同音であることがわかる。この字音検索方法は一見雑なようであるが、その実は穏当なものである。邵光祖は『切韻檢例』（『切韻指掌図』巻末に附す）でこの種の方法が「万に一を失わない」ほど確実であるという。検索に習熟すればほかに何の手続きも要らず、いわば反切上字を見るだけでそれがどの字母に属するかが解り、またそのまま反切下字が属する韻図を見るだけでよいのである。

この方法を「横推直看（横列と縦列をみる）」という。反切下字はわれわれが検索する読音と同じ韻図にあり、その横列を検索する。反切上字はわれわれが検索する読音と多くは別の韻図にあり、その縦列を検索する。

時にはわれわれはめったにない字に出くわすことがある。例えば第一図「皓」韻上声一等を検索していて「疑」母の下に「積」字が見つかるが、さてこの字が解らない、どうしたものだろうか。心配することはない、平声一等にはどんな字があるか、去声一等にはどんな字があるかを見る。その結果、平声一等には「敖」字があり、また去声一等には「傲」字があるので、「積」字は「傲」字の上声に読むことが解るのである。

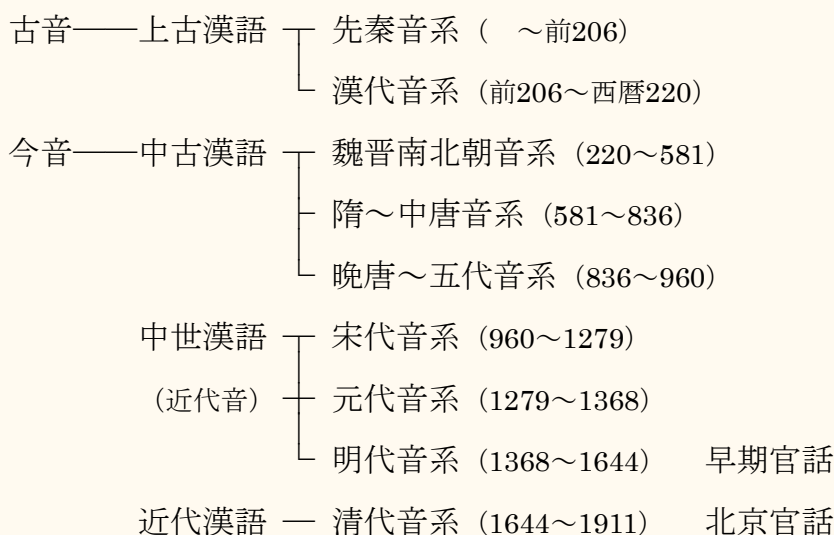
注一：白川静訳注『詩経国風』（東洋文庫）より。

辛巳孟秋鴻鴈來

第6節——古音学

「古音」^{注一}というのは伝統音韻学では上古の語音系統のことを指している。

注一：古音と今音、上古・中古などの時代関係を図示する。



1. 上古の韻母系統

『詩經』三百篇^{注二}は上古の韻母系統を（以下、古韻と簡稱する）を研究するのに最上の根拠であるが、残念ながら先人たちは『詩經』を正確に利用して古韻研究を開始したわけではなかった。その原因は、彼らの歴史的観点の欠如であり、言語が発展変化することと理解せず、古音は今音と同じであると思ひ込み、せいぜい詩作に当たって押韻したに違いない必然から、臨時にしかじかの字の読音を変えて読むに過ぎなかった。宋代にはこのような作られた読音のことを「叶音」^{注三}と叫んだ。

朱熹が著した『詩集伝』^{注三}にも大量の叶音が応用されており、同じ「家」という字が「古胡反、古乎反、音谷、各空反」などさまざまな叶音で読まれるのである。このような臨時改読に道理のあろうはずがなく、特に叶音が「谷」になったり「各空反」になったりするのは荒唐無稽ですらある。

叶音説は明代に到ってようやく、陳第によって批判されることになる。しかし現在ですらなお叶音説を信じる人がいるように、音韻学が普及するのを待たないとこれを廃絶することはできなかった。陳第は「時には古今があり、地には南北があるように、字は変化する

もので、音は転移するものである」と考えたのである^{注四}。時間概念と地理概念を持つことで、古韻研究によろやく科学的な道が開けたのであった。

注一：西周の昭王・穆王（前993～941）時代の伝承廟歌（頌）、西周晩期（～841）の祭事・饗宴歌（雅）、同時期から春秋後期の秦の穆公の没年（前621）に至る時代を中心にした民衆歌謡（風）を編集したもの。孔子の時代（前552～479）には楽師により伝承され、詩句の内容は士大夫必修の古典教科とされた。漢代には数家の解釈（伝）が作られたが、毛亨の伝とそれに対する後漢の鄭玄の解説（箋）が後に正宗とされた。

注二：「叶韻」「協韻」とも。例えば、国風・燕燕三章の偶数句は「下上其音」（其の音を下上す）、「遠送于南」（遠く南に送る）、「實勞我心」（実にわが心を勞す）となっているが、「音」「心」（切韻「侵」部 [əm]）と「南」（同「覃」部 [am]）は押韻していない。南北朝時代の沈重『毛詩音』はこの「南」に注して「協句、宜“乃林反”」、すなわち「音」「心」と押韻するように読むべき句であるとする。

注三：朱熹（1130～1200）の『詩集伝』は、毛伝が国風の歌謡を春秋時代の諸国の建国者以来歴代の国君とその家族を風刺するものと解釈してきたのに対し、民衆風俗を反映するもの解釈として、「新注」とされた。

注四：陳第（1541～1617）『毛詩古音考』^{もうしこいんこう}（1601）自序より。叶音を否定し、古韻は今韻と異なるものであったという歴史的变化の説をとえ、『詩経』から498字を引用して「本証」とし、その外の古典韻文による韻字を「旁証」として併記した。上古音韻の体系化には至らなかったが、清朝古音学の先駆者となった功績が評価されている。

古韻の研究が始まってから、宋朝から現在までの成果はめざましく、その主要な成果は古韻分部の領域である。宋の鄭庠以来、古韻分部を手がけた者は数十を下らないが、比較的重要なものは以下の通りである。

宋	鄭庠	『古音弁』、古韻は六部に分けられた。
	吳棫 1100～1154	『韻補』、古韻は九部に分けられた。
清	顧炎武 1613～1682	『古音表』、古韻は十部に分けられた。
	江永 1681～1762	『古韻標準』、古韻は十三部に分けられた。
	段玉裁 1735～1815	『六書音韻表』、古韻は十七部に分けられた。
	戴震 1723～1777	『声類表』、古韻は二十五部に分けられた。
	孔広森 1752～1786	『詩声類』、古韻は十八部に分けられた。

王念孫 1744~1832 / 江有誥 ?~1851

古韻は二十一部に分けられた。

夏炘 1789~1871 『古韻廿二部集説』、古韻は二十二部に分けられた。

民国 章炳麟 1869~1936 古韻は二十三部に分けられた。

黄侃 1886~1922 古韻は二十八部に分けられた。

以上の分部学説の中では、誰もが夏炘の二十二分部を比較的妥当なものと思うであろう。ところがその実、夏炘の二十二部は王念孫と江有誥の二十一部^{注一}を合わせて作ったものなのである。章炳麟はその後二十三部に分けたのであるが、ただ「隊」の一部を増加したものに過ぎない。現在では二十二韻部は以下のようになっている：

注一：王念孫の「東部」を江有誥は「東部」と「中部」に分け、また前者が分けていた「脂部」と「至部」を「脂部」に合わせていた。

1 之 [ə] 部	2 幽 [u] 部	3 宵 [o] 部
4 候 [ɔ] 部	5 魚 [a] 部	6 歌 [ai] 部
7 支 [e] 部	8 脂 [ei] 部	9 至 [et] 部
10 祭 [at] 部	11 元 [an] 部	12 文 [ən] 部
13 真 [en] 部	14 耕 [eŋ] 部	15 陽 [aŋ] 部
16 東 [ɔŋ] 部	17 中 [uŋ] 部	18 蒸 [əŋ] 部
19 侵 [əm] 部	20 談 [am] 部	21 葉 [ap] 部
22 緝 [əp] 部		

数年前、王力先生は『漢語史稿』を著し、古韻を十一類二十九部^{注一}に分けると主張された。以上はその十一類二十九部と『広韻』の対照表である。

注一：人民衛生出版社『医古文』（1985）と同年に、王力『漢語語音史』（中国社会科学出版社）が刊行されている。王力の十一類説は孔広森の陰陽対転の考えにもとづく戴震の陰陽入対転、つまり元音が共通な陰（元音収尾）・陽（鼻音収尾）・入（入声収尾）韻を同一類とする説の発展上にある。戴震はこうして九類二十五部説を唱えたが、段玉裁も実は陰陽入を同一韻部とみなす八類二十五部説、王念孫は十類二十七部説であったといつてよい。黄侃は章炳麟の二十三部説をもとに五部多い二十八部説を立てたが、王力は黄侃の「脂部」を脂部・微部に、ま

た「蕭部」を沃部・覺部に分け、先秦十一類二十九部（戦国時代三十部－戦国時代の「冬部」は先秦「侵部」から分離）説を立てた。

無 韻 尾	ə 之：之哈（灰尤）	韻 尾 -k	ək 職：職徳（屋）	韻 尾 -ŋ	əŋ 蒸：蒸登（東）
	e 支：佳（齊支）		ek 錫：麦（昔）		eŋ 耕：耕清青（庚）
	a 魚：魚模（虞麻）		ak 鐸：陌（藥鐸麦昔）		aŋ 陽：陽唐庚
	ɔ 侯：侯（虞）		ɔk 屋：燭（屋覺）		ɔŋ 東：鐘江（東）
	o 宵：宵（蕭肴豪）		ok 藥：（沃藥鐸覺錫）		
	u 幽：尤幽（蕭肴豪）		uk 覺：（沃屋覺錫）		(uŋ 冬：冬江)
韻 尾 -i	i 微：微灰（脂皆）	韻 尾 -t	ət 物：没迄物（末術）	韻 尾 -n	ən 文：文欣魂痕
	ei 脂：脂皆齊（支）		et 質：至質櫛（術黠）		en 真：真至秦先（諄）
	ai 歌：歌戈（麻支）		at 月：祭泰夬廢月末曷薛		an 元：元寒刪山仙（先）
		韻 尾 -p	əp 緝：緝合（盍）	韻 尾 -m	əm 侵：侵覃（咸凡東）
			ap 盍：葉帖業狎乏（盍）		am 談：談塩添嚴銜（咸凡）

2. 上古の声母系統

漢語音韻学において、上古声母の系統的研究は上古韻母の系統的研究成果に比べるべくもない。その主要な原因は比較材料の欠乏にある。上古韻部の研究に当たって、われわれは先秦の韻文を根拠とすることができたのに対して、上古声母の研究に当たってはこのような優越条件というものがない。このような事情であっても、音韻学家はこの方面の作業でも幾多の少なからぬ価値ある業績を残している。いまその内の重要な発見事項を列举してみよう。

1 上古には軽唇音がなかった

錢大昕^注が始めに上古に軽唇音がなかったという説を唱えた（『十駕齋養新録』卷五に見える）。その説によれば、上古には「負」は「背」のように、「附」は「部」のよう、に、

「仏」は「彌」のように、「逢」は「蓬」のように、「文」は「門」のように発音されていた^{注二}。

注一：錢大昕（1782～1804）は江蘇省嘉定の人、乾隆の進士で経典・史書の官となるが帰郷。『恒言録』『音韻問答』など著書多数。

注二：三十六字母表の非 [f]・敷 [f']・奉 [v]・微 [ε] は上古に幫 [p]・滂 [p']・並 [b]・明 [m] に属していた。仏（敷）、負・附・逢（奉）、文（微）は軽唇音、背（幫）、部・蓬（並）、門（明）は重唇音。錢大昕は伏羲が庖羲とも書かれ（伏は奉、庖は並）、鳳（奉）が鵬（並）とも表記されることで漢魏以前の軽唇音の不在を証明した。

2 上古には舌上音がなかった

錢大昕はまた、舌頭音と舌上音が分化していなかったという説も唱えた。その説によれば、上古には「陟」は「得」のように、「直」は「特」のように、「竹」は「篤」のように、「陳」は「田」のように、「木長」は「棠」のように発音されていた^{注一}。

注一：舌頭音（端・透・定・泥母）が舌上音（知・徹・澄・娘母）と区別されなかった。陟・竹（知）と得・篤（端）、直・陳・木長（澄）と特・田・棠（定）などが漢魏以前の文献でたがいに注音表記するために用いられていることから、舌上音の不在を証明した。

3 娘母・日母は泥母に属した

章炳麟^{注一}によれば娘・日の二母はいずれも上古には泥母に属していた（『国故論衡』上、古音娘日二紐帰泥説）。諧声符^{注二}からいえば涅ヂツと翻ヂツはいずれも日声になるが、涅は泥母、翻は娘母に属す。声訓記述でも、『釈名』に「男、任也」とあるが、男は泥母、任は日母に属している^{注三}。

注一：章炳麟（1869～1936）は浙江省余杭の人、孫文の枢密顧問となるが、のち考証学を修め、『文始』『新方言』『小学問答』など著書多数。

注二：古代には原因・婚姻・灰色の馬の意味で「因」と言ったが、偏旁をつけて類別を表し「姻」「駟」のようにする諧声文字の発音符。

注三：乃と仍、孺と儒、奴と如のような同一の諧声符は本来発音に差異がなかったであろうという前提で、泥母（舌頭次濁）・娘母（舌上次濁）・日母（半舌半齒次濁）の三字母の区別がなかったと唱えたもの。「古音には泥紐有りて、其の後に支別す。則ち舌上に娘紐有り、半舌・半齒に日紐有るも、古音には皆に泥紐なり」（『国故論衡』より）。

4 照系の二等は精系に属した

これは黄侃^{注一}が主張したもので、これもやはりたいそう理に適っている。

注一：黄侃（1886～1935）は湖北省蕪春県の人、清以来三百年にわたる古音学の殿軍と称され、『音略』『声韻通例』『説文略説』など著書多数。照母（正齒全清）には等韻図で二等・三等があるが、その二等は上古には精母（齒頭全清）に、また三等は端母（舌頭全清）に属した。

5 喻三は匣に属した

これは曾運乾が研究の結果、喻母の三等を于母と称したものである。上古には「宮」は「環」のように、「援」は「換」のように、「羽」は「扈」のように、「員」は「魂」のように発音された^{注一}。

6 喻四は定に属した

これも曾運乾が主張したもので、上古には「夷」は「弟」のように、「易」は「狄」のように、「逸」は「迭」のように発音された^{注一}。

以上に挙げた六点は、いずれも大変な参考価値のあるものである。現在の呉方言^{注二}では「文」という字を「門」のように発音し、また「日」という字を「泥」声母のように発音する。

注一：曾運乾（1884～1945）は湖南省益陽の人、東北大学・中山大学・湖南大学教授を歴任して、「喻三歸匣・喻四歸定」説で有名。環・扈・魂は匣母、狄・迭は定母に属す。

注二：「呉語」を呉方言と訳したが、漢語方言の五大音系に1官話音系（北京語等）、2呉音系、3粵音系（広東語等）、4客家語系（^{ハツカ}客家語系）、5門音系（台湾語等）があり、呉音系の分布地域は浙江省の大部分と江蘇省の鎮江以東（鎮江は入らない）の長江沿岸地域で、最大の特徴として中古音の全濁音に対応する有声音母の存在がある。呉方言といえば、江蘇省武進の人、胡文英は乾隆30年の郷試の補欠^{ハツカ}及第し高陽県知事を務めたが、『補王応麟詩考』などの著書がある音韻学者でもあり、30年の歳月を費やして蘇州の語彙987について過去の文献を渉漁した『吳下方言考』十二卷（1783年刊）を著した。

最近、王力先生は『漢語史稿』の中で以下に挙げるような上古声母表を復元している^{注一}。

注一：上古韻母表と同じく、王力『漢語語音史』の表に差し替えて掲載する。発音部位（音声器官）について原本の表では伝統的音韻学の名称が用いられているが、『漢語語音史』では現代音声

学の名が用いられており、その内容は次の通りである。

双唇　：上下の唇を調音器官とし、唇の閉鎖により発声する。

舌尖前：舌尖と上前歯の閉鎖によって調音する。

舌尖中：舌尖と上歯ぐきの閉鎖によって調音する。

舌葉　：舌尖から舌面にかけて上歯ぐきから口蓋にかけて接触、発声する。

舌面前：舌面が上歯ぐきから口蓋にかけて接触して発声する。

舌根　：後舌面を軟口蓋に接触して発声する。

喉　　：声門を閉鎖してこれを破裂させる、声門破裂音。

発音方法		発音部位	双唇	舌尖前	舌尖中	舌葉	舌面前	舌根	喉
塞音	清音	無気音	p 幫非		t 端知		t̚ 照	k 見	○ 影
		有気音	p' 滂敷		t' 透徹		t' 穿	k' 溪	
	濁音	b 並奉		d 定澄		d̚ 神	g 群		
鼻音			m 明微		n 泥娘		ɲ 日	ŋ 疑	
辺音					l 来			ʎ 喻四	
塞擦音	清音	無気音		ts 精		tʃ 莊			
		有気音		ts' 清		tʃ' 初			
	濁音		dz 從		dz 牀				
擦音	清音			s 心		ʃ 山	c 審	x 曉	
	濁音			z 邪		z 俟	z 禪	ʂ 匣喻三	